

## 「未踏へのラストスパート」 Lopchin Feng 6805m 登頂記

近藤昂一郎

2009年11月7日、朝三時半、C-3にて起床。直ぐに外の天気を確認すると、テントが揺れていないので「今日はいけるのでは」という寝袋の中で感じた期待は裏切られていなかった。風はなく雲ひとつない快晴だった。私と矢崎さんは逸る気持ちを抑え素早く朝食を取り準備を済ませ中国隊を待った。しかし待てども待てども中国隊は来ない。外の気温は氷点下十五度以下。テント内といえども非常に寒く、何度もガスを空焚きして寒さをしのいだ。そのうちしびれを切らし先に行こうかとも考えたが、やはり前日の打ち合わせどおり中国隊と一緒に行動する方が安全で確実だろうということで辛抱強く待った。しかし七時半頃その行為が報われないことを知った。中国隊のメンバーの一人が負傷し引き返したのだ。出発する前からトラブルに見舞われ若干不安を感じつつも、無線連絡を受けた後すぐに出発した。

登り始めの頃、太陽はすでに昇っていたがルートや周りの地形の関係で陽は当たらずいくら風がないとは言え寒さが身に伝える。特に足の指先が酷く千切れるのではと思うほどだった。登り始めて1時間ほどして雪が大分クラストしてきたのでスノーシューを脱ぎ、アイゼンを装着した。荷物を軽くするためスノーシューは6100m付近にデポした。しかしこの判断を後のほうで後悔する事になる。アイゼンに履き替えたあたりから勾配がきつくなり確保しながら登ろうか思案していると少し先にフィックスロープを発見、これは有難いと思いトラバースしながらロープまで行きユマールを使って登った。フィックスロープはしばらく続いており200m程は安全に登ることができた。しかしこの勾配はきつく、脹脛を酷使し二人して「脹脛が、脹脛が」と呻きながらの登山が続いた。上を向くと濃い紺色の空と純白の稜線とのコントラストが美しく、スカイラインに向かって登ることがまるで空を上っているかのようでとても楽しかった。スカイラインまで登りきると先ほどよりは少し勾配が緩くなったがラッセルが出てきた。予想以上のラッセルの出現にスノーシューを置いてきたことが悔やまれる。とは言え無い物は無いのでひたすらラッセルを続けた。二人しかいない上に雪質がサラサラなのでいつも以上にしんどいラッセルとなった。このラッセルが終わると今まで見えなかった向こう側を見ることが出来た。誰も見たことがない景色、高度が高いにもかかわらず山々は緑に覆われ所々に湖が見える。絶滅した動物が生息していても不思議ではない印象を受けた。しばらく景色に見とれていると山頂方向に鳥の飛んでいる姿が見えた。それを見ながら人はこんなにも苦勞し努力してやっと見ることが出来た景色をいとも容易く見ることが出来る鳥を羨ましく感じた。

景色を堪能し十分に休憩を取り終え頂上に向けてラストスパートをかける。GPSだと高度は6450m、残り200mちょい。(この時はまだ頂上が6700m前後だと思っていた)天気も良く時間にも余裕があるので十分に頂上アタックは可能だろうと思っていた。休憩後しばらくは所々脛までもぐる程度の雪で、勾配がさらに急になりはしたが午前中のラッセルに比べたらずいぶん楽なルートだった。これなら2時間以内には着くのではと考えながら登っていた。しかし3,40分ほど登ったらそれが甘い考えだということを思い知らされた。頂上付近の巨大雪庇下数十m、ここにきてさらに酷いラッセルが現れた。腰まで沈むラッセルでちょっとやそっと固めただけでは全然登ることができない。掘りに掘って完全にサラサラな雪をどかし硬い雪面を出してようやく登ることができた。さらに悪いことにガスが出てきて上の様子が

わからなくなり、今どのあたりにいるかが分からず精神的にもしんどくなってきた。今までトップを行ってくれていた矢崎さんと交代し突き進むが、時間はどんどん過ぎていく。もう無理かと思っていたら突然目の前に氷の壁が出現した。



頂上直下を登る近藤隊員

ついに頂上付近の雪皮下に着いた。私はうれしさのあまり矢崎さんに「雪皮下に着きました、あともう少しで頂上です！」と叫んだ。しかし矢崎さんは追いつくと「時間切れだから下ろうか。」と提案してきた。確かにくだりの時間を考えるとここ引き返すことが懸命だとは思いますが、ほんの十数メートルを目の前にして下るのは悔しい。無線でも登攀隊長の山本さんは下山するように言ってきている。もうだめかと諦めかけていたら井上さんが「あと少しなので行って来い」と言ってくれたので最後のひと登りを行くことができた。最後の雪庇を突破し頂上に立つことができた。今

までの登りに比べて最後のひと登りがあまりにもあっけなかったの、最初ここが頂上かどうか半信半疑でありもし間違っていたらどうしようという思いから思わず無線で「ここが頂上なんですか？」と訊ねてしまった。それを受けた井上さんが「そこが頂上です、おめでとう」と、今思い返すとなんとも間抜けな会話をしてしまった。

残念ながら頂上に着いたときは周りがガスに覆われていたため周りの景色を見ることは出来なかったが、真上の方は青空が見えていて、周りを見渡すとここより高いところはないので頂上だと確認することが出来た。頂上に着いたとき私と矢崎さんは「着きましたね」と簡単な言葉を交わし静かに握手をして登頂成功の喜びを分かち合った。写真を撮り GPS で高度を確認した。すると従来 6708m とされていたが 6805m と表示され 100m 高いということが分かった。

写真を撮り終え急いで下山をすることに。下る頃には益々天気が悪くなっていたが、視界は十分にあった。このとき矢崎さんは登りの疲れなどから軽い高度障害を起こし私がトップで下山をした。時間が無いので慎重に下りながらも出来る限り急いで下った。無線は常にオープンにし常時 C3、C1 と連絡を取り合った。途中矢崎さんがクレバスにはまるのが 2,3 回あり、また所々トレースが消えている所があって困難を極めた。だからフィックスロープが見えてきたときはほっとした。登るときはこんな急斜面を無事に下れるだろうかと思っていたが、いざ下っているとそんなことを考えている余裕が無かった。



登頂 矢崎隊員

フィックスロープが終わる頃、周りが完全にガスで覆われトレースを完全に見失った。これは本格的に

ビバークをすることを覚悟しておいた方がいいかとも思いつつも下山を続けた。しばらくはコンパスと記憶を頼りに進んでいると行きにデポしたスノーシューを発見した。スノーシューを発見したことで方向を間違えていないことが確認でき、より詳細な現在位置を知ることが出来た。ここにきてスノーシューをデポしたことが幸いした。いやそもそもスノーシューを持って行ったらこんなことにはならなかったのか。ここから C3 まではただっ広い斜面になるので GPS を使い方向を確認しながら進むことが出来た。正に GPS 様様である。

この時にはもう完全に陽は落ちており、GPS を頼りにとにかく下った。C3 まであと 3-400m という所で矢崎さんが C3 の明かりを見つけた。その明かりを見つけたとき以上の安堵感は今まで生きてきて感じたことは無かった。明かりを見つけたことを無線で C3 に待機していてくれた山本・石丸ペアに伝えた後、迎えに出てきた二人と合流することができ無事に下山することが出来た。